研究報告

“庭”と“山水”

木村三郎*

NIWA and SANSUI
(Court and Landscape)

Saburo KIMURA

摘要: 庭(屋前・爾波・尔波・場)対山水(サンスイ・センスイ・センズキ)。これらの用語も含めて用語にはそれぞれに歴史性をもつ。しかも、それらの用語は造園手法の質的内容さえも規定することがある。これらはわが国特有のキメ細かな国民性を物語るものといえる。これらの用語の歴史を追究する方法としては「造園関係古語系譜」〔以下「系譜」という。その1)~7)までは本誌 Vol. 45, No. 2 拙稿参照〕を、よく知られている歴史的諸文献の中から作成し体系づけることが考えられる。本稿は、前報に引き続き「系譜」(8)を追加し、「庭」及び「山水」の意義について究明しようとするものである。

1. 発端

古くからわが国は隣国中国の影響を受けて絵画の部門でも唐絵と倭絵とがあったように、造園の分野においてもその関係用語の上からもそれが見られる。また漢語(真名字)中心のものと和語(仮名字)中心のものとを対置させることからそのことを窺い知ることが出来る。例えば潺湲対ヤリミズ、潢(庭)濼対ニハタヅミ、山水(センスイ)対せんずゐなどもその一斑をよく物語っている。また、木立・立石・前栽(『源氏物語(明石)』参照)などと和製漢語が日本風土の中で育っていることも見逃すことが出来ない。前回発表した「系譜(4)」でも明らかなおと、明治維新当時の政府要人がいかに苦勞して外来語を邦訳したかがよくわかる。その中から「公園」(パーク)というわが国独特の概念も芽生え定着していったのである。

そこで「系譜」の作成にあたっては、可及的に信憑性の高い、また普遍性のある文献を選んでいる。そして今回は古事典類や古辞書類を中心において作成した。「系譜」(8)がそれである(注:「系譜」番号は前回からの通し番号。各著述年代は主として市古貞次編『日本文学年表』(昭51)に準拠した)。

2. 「造園関係古語系譜」〔(8)―古辞書・辞典類〕
イ) 色葉字類抄(1165)

勝地、形勝、美景、光景、遊覧、樹林、樹(ウエキ)、前栽(センサイ)、栽(ウエ、種、殖、植)、築(ツク)

山、樋(ヒ)、潺湲(センエン、ヤリミズ)、山川草木、泉(セン、イヅミ)、杜(モリ)、曲水(コクスイ)、池水、鳳池、洲渚、透垣(スイカキ)、数奇(スキ)、蓬萊神仙、閑居、野墅(ヤシヨ)、別業(ベツギョウ)、蔽石(イハハ、カムセキ)、磬(イワ、大石)、坪(ツボ、ナタラカ)、壺(コ、ツボ)、園・圃・苑・囿(ソノ、ホ、エン、ユウ)、庭(ニワ、堀、場)、潢濼(ニワタヅミ、雨水)、龍(リュウ)、頭鵠首、闕草、寢殿、樓閣、釣臺(ツリドノ)、金堂、燈籠(楼)、四阿(アツマヤ)、路次、田舎(イナカ)、隠居等(注:同時代『類聚名義抄』参照)

ロ) 文鳳鈔(1246―同時代『字鏡集』参照)

地:勝地(崑崙山―仙人所居)、勝形(幽勢)、風流妙(水石幽);山:山地、山家(白樂天香廬峯ノ下ニ草堂ヲトス)、暮山、山遊;谷(子午城、菊水)、林:林亭(七覽遊所)、野(郊外ヲ野トイフ)、水、水郷、潺湲、水閣、水樓、池台、池閣、水路、鏡水、逃水、海(附):蜃氣樓、桑田変、滄海ノ中ニ蓬萊・方丈・瀛洲三ノ、神山アリ仙人集ル所。又、渤海ノ東ニ大嶽有リ其ノ中ニ岱山・負嵩(エムキク)、方壺・瀛洲・蓬萊ノ五山アリ(「列子」);江:濫觴水、錢塘江(錦水)、明月峽;湖:鏡水、洞庭湖、黄河、桃河水(三月水);池:高陽池(山見山ノ南)、昆明(大液);甘泉台、瀑布;石:奇石、幽石、古石、黄石、白石、(附)廬山頂池有リ、中二三石(陽石、陰石、越王石)アリ;山水、山海、山河、山野、山林、山澤、山谷、嶺谷、林池、林泉、林園、林野、郊園原野、関山、開山、水樹、水竹、漱石、水石、水草、江

* 名誉会員

山, 江湖, 江海, 江河, 池苑, 泉石, 洲渚等 (以上「地
儀部」)

城 (附): 黄帝五城十二楼ヲ為ス。神仙ヲ浮 (ウカ)
べ, 崑崙山ニ五城十二楼アリ (『淮南子』), 之ヲ模シ禁中
九重城, 城ノ名 (鳳凰, 洛陽, 長雲) 云々; 禁中: 御苑
御溝, 仙殿, 仙庭, 禁苑, 禁庭, 禁林, 禁松, 禁樹, 紫
宮, 鳳闕 (鳳池); 楼: 高楼, 玉楼, 山楼, 妓楼云々;
亭 (附): 梁ノ元帝芙蓉亭ヲ造リ遊宴ス。流水ニ因ッテ
觴ヲ泛べ, 天下ノ名士ココニ集ル。詩酒アリ管弦ナシ云
々; 階 (階庭), 庭 (沙庭, 前庭, 閑庭); 門 (槐門)。
陶潜 (註: 陶淵明) カ門ニ五株柳ヲ栽タリ, 故ニ五柳先
生云々; 窓 (附) 白楽天竹ヲ愛シ, 北窓ニ竹ヲ殖タリ;
牆, 籬 (附) 陶先生東籬菊ヲ摘ム; 園 (附) 梁ノ孝王ノ
菟園多ク竹ヲ植タリ, 之を修竹園ト謂フ。常ニ遊宴; 茶
畝, 田家, 故卿 (附) 陶潜帰去来, 都城 (附) 東都ヲ以
テ主トナシ西都ヲ以テ賓トナス; 村邑, 田園, 田野, 市
井, 官館, 樓基, 樓閣, 樓殿, 樓塔, 基樹, 亭閣, 窓戸,
戸庭, 門庭, 壁等 (以上「居處部」)

寺: 雲寺 (露地, 月殿), 山寺 (野寺, 湖寺, 洞房),
蕭寺, 仏閣 (仏地, 仏庭, 僧院, 僧庵, 僧舎, 梵宮, 梵
寺, 禪寺, 禪庵), 禪林 (禪樹, 道樹, 祇樹, 宝樹, 伽
藍), 精舎, 精廬等 (以上「釈教部」)

ハ) ①温故知新書 (1484), ②運歩色葉集 (1548), ③
撮撰集 (1454) 等

①蓬萊・方丈・瀛洲 (三壺也), 輓庭浮瀛 (ヤリミズ,
瀛波), 樋 (トヒ), 洲浜, 泉水, 築山, 築垣, 園・圃・
苑 (ソノ), 庭 (堂階前, 門庭, 場), 路次, 露台, 樓閣
離宮, 別業, 遊山 (ユサン), 都鄙, 無可有郷 (註: ユ
ートピア, 『万葉集』初見), 生得等

②竜頭鷄首, 蓬萊山, 瀟湘八景, 樓閣, 宝形作, 方丈
別墅, 別業, 本所, 庭・塀, 洲崎・洲浜, 露地, 路次, 路
傍, 盆山・盆假山 (カサン), 前栽・前水・泉水, 煎茶,
遣水 (ヤリミツ), 透垣, 築垣, 坪ノ内, 躑 (ニジリ),
踟躕 (ツクバウ), 名所, 遊山, 遊覧, 野遊, 花鳥風月,
発句, 生得 (ショウトク, ウマレツキ), 隠居, 風土,
風光, 風流, 風雅, 風情, 端居 (ハンイ) 等

③假山山水也, 町 (マチ), 坪 (ツボ), 園・圃・圃・
苑 (ソノ), 庭 (場), 籬・芭, 汀 (ミギハ)・渚 (ナギ
サ), 燈籠, 庭燎, 寢殿 (和名), 釣殿, 渡殿, 四阿, 母
屋, 対屋, 煎茶, 抹茶, 茶甕 (セン), 茶壺 (ツボ), 俳
諧, 発句等

④節用集類 (文明本・弘治本・永禄本等) 例「セ行」:
泉水・センスイ・センズイ・或作「前水」即庭也, 前栽
(センサイ, センザイ), 仙境, 背戸 (セド, 後園也),
雪隠 (セツチン, 西浄) 等

3. 「庭」についての解析

まず, 歴史書の基本となる『記紀』 (註: 岩波本「日

本古典文学大系」参照) のうち『古事記』の中から, 庭
つ島 (神代紀), 家庭 (夜邇波一応神紀), 沙庭 (仲哀紀)
庭中 (韓人の家の一仁徳紀), 獵庭 (安康紀), 庭雀 (雄
略紀), 大庭 (おほには一重仁紀) などが散見される。
ついで『日本書紀』の中には斎庭 (神代紀), 掖庭・淑
庭 (重仁, 景行, 仁徳各紀), 殯庭 (敏達紀以下多出),
宴の庭 (景行紀), 大庭 (おほば) に宴す (清寧紀), お
ほば (推古以下多出), 南庭 (おほば, 同上), 大極殿の
庭, 東庭に射 (射庭, 同上) など, すなわち公式の場と
しての庭が大勢を占めている。その他に, 庭つ島 (継体
紀), 邑人の庭 (欽明紀), 館の中庭 (敏達紀), などが
あり, いずれも庭の趣味的, 観賞的な色合いはほとんど
ない。ただ『記紀』の中で特異な記事はよく知られてい
る推古朝33年夏5月の条の「蘇我馬子一飛鳥河の傍に家
(いへ) せり。乃ち庭 (には) の中に小なる池を開
(ほ) れり。仍りて小なる嶋を他の中に興 (つ) く。故,
時の人, 嶋大臣と曰ふ」一文である。このことについて
は後段でいささか私見を述べることにする。

ところで, 故大槻文彦著『大言海 (昭9)』によれば庭
(には) とは「土間 (ハニマ) の略転」とし, 「(1) 堂屋
階前の平地, (2) 後世専ら前栽・園生など家の前の空地に
樹木・草石・築山・泉水などで景色を作れる処, (3) 広き
場 (海陸とも) に事に用いる空地, 場・場所, (4) 海上平
にして船を乗り出すに好き所, 船漕ぎて行く海面, (5) 家
の内の土間, (6) タタキの土間」と解釈している。この中
で大槻博士は(2)後世景色を作れる処として庭を規定し,
今日の造園術とのかかわりを強調されているが, 残念な
がら, その後世とはいづの頃からか言及されてはいない。
上述の蘇我馬子の私邸こそは正しくその第一号の資格が
与えられて然るべきであろうが, その後これに類似した
記事は見当たらない。そこで最も普遍性の高い『万葉集』
の中で位置づけられている庭 (屋前・尔波など) につい
て, さらにいささか詳述して見たい。

(屋前) 秋さらば見つ思へど妹が植えし屋前のなでし
こ咲きにけるかも (464), わが屋前の萩さきにけり散
らぬ間に早来て見べし平城 (なら) の里人 (2287),
わが屋前の花橘にほととぎす今こそ鳴かめ友にあへる
時 (1481), 今日ふりし雪に競いて我が屋前の冬木の
梅は花咲きにけり (1649) 等

(尔波) たちばなのした照る爾波に殿建てて酒宴 (さか
みづき) いますわが大君かも (4059), おとめらが玉
裳裾びくこの尔波に秋風吹きて花は散りつつ (4452),
秋風の吹き扱 (こ) き敷ける花の尔波に清き月夜に見
れど飽かぬかも (4453), 飼飯 (註: けひ, 武庫) の
海の尔波 (庭, には) 好くあらしかりこも (刈菰) の
乱れ出づ見ゆ海人の釣船 (256) 等

(庭) 夕月夜心もしのに白露のおくこの庭にこおろぎ鳴
くも (1552), 遊ぶ内の楽しき庭に梅柳折りかざして

は思いなみかも (3905), わが園の李の花か庭に落りしはだれのいまだ残りたるかも (4140), 庭に立つ麻手刈り干し布さらす東女を忘れたまふな (521) 等 (屋戸一屋前に準ず, 家) 去年の春い掘 (こ) じて植えしわが屋戸 (屋外) の若樹の梅は花咲きにけり (1423), わが屋戸 (屋外) に蒔きしなでしこいつしかも花に咲きなむ比 (なぞ) へつつ見む (1448), わが背子が屋戸 (夜度) のなでしこ散らめやもいや初花に咲きは増すとも (4450), 珠に貫くあふちを家 (宅) に植え (宇恵) たらば山ほととぎす離 (か) れず来むかも (3910) 等

以上の通り「万葉」にも後半期のものに次第に庭に植栽して楽しむ姿がうかがえる。一般に『万葉集』に選出された最終の歌は天平宝字三年 (759) 正月の太伴家持の作となっている。ちなみに, 751年 (奈良時代中期) 頃に作られたといわれる『懷風藻』[「系譜」2] 参照) には庭林, 庭梅, 竹葉禊庭, 階梅, 門柳などの用語も見られ, 優秀な万葉歌人の一人太伴旅人 (665~731 従二位没) の晩年の作: (吾妹子が植えし梅の樹見ることこころむせつつ涙し流る, 453) も太宰府長官の任をおえて帰京した旅人が彼地で他界した夫人を哀悼して歌った一首であることはよく知られ, 庭樹を通じてその情愛がよくうかがえる。また, 同じ対歌に「妹として二人作りし吾が山斎 (しま) は木高く繁くなりけるかも, 452」もその同趣の一首にちがいない。

既に『万葉集』を通じて言及した通り, 庭を屋前と読ませていることと関係させて考えれば前栽とは屋前 (庭) に栽えられた草木にちがいない。一般に前栽の初見として詩集『凌雲集』(814) の中に「前栽細菊吐。新心。」の一句があり, まさに屋前に栽えた小菊云々と読むべきものであろう。この前栽の用語こそは『伊勢物語』以後わが国の造園史上一貫しておびただしく登場する造園用語の代表例にちがいない。この用語は『源氏物語54帖』(1008) にも最も多く使用され, その数は40箇所にも及ぶとされている。

前栽と同時に庭の趣味性を高めていくのは池水にちがいない。所謂造園様式の中に池水が見られるのは「山斎」(志満) によって代表される別業・別墅等所謂苑・園のジャンルの場合とこれとは別に所謂庭のジャンルの中の池水の場合とがあげられるが, 後者の場合はほとんど見当らない。『古今和歌集』の撰者の一人紀貫之 (868 年頃~945年頃, 従五位没) の『土佐日記』(935) の末尾には次のような一節がある。貫之は延長8 (930) 年土佐守に任ぜられ, 承平5 (935) 年2月に帰京している。任地では女兒を失いこのことも手伝って, 京にもどり預けた家も荒れて「いとはつらく見ゆれど, こころざしはせむとす。さて池めいてくぼまり, 水つけるところあり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに千年や過ぎ

にけむ。かたへ (註: 半分) はなくなりけり。いま生ひたるぞまじれる。大方皆荒れにたれば「あはれ」とぞ人々いふ。(中略) ひそかに心しれる人といへりけるうた (むまれしもかへらぬものをわがやどにこまつのあるがみるかなしき) とぞいへる云々」と結んでいる。すなわちこの中での貫之の旧宅の庭が一部に窪みがあって水が溜って小池のようだというのである。換言すれば従五位級の中級官吏の庭は池らしきものもなくただ小松の生えた風情に乏しい庭であったことが想像される。さてひるがえって高級官僚藤原一族については島田忠臣の『田氏家集』(891) の中に「大相府東庭貯。水成。小池。小池種。一紫藤。至。於今春。始発。花房。酌。於花下。以賦。之」とある。この大相府は太政大臣藤原良房 (在位856~872) 又は同基経 (在位880~890) と推定されるが, 南庭については触れられてはいない。降って藤原兼家 (在位989~990) の東三條第になるとその豪華な寝殿造りであったことがうかがえる。その子藤原道長もこの豪第を伝領している。『大鏡』(1025~93) には「おゑには北方もおはしまさざりしかば, おとこずみにて東三條どのの西の対を清涼殿づくりに御しつらひよりはじめて, すまわせたまふなどぞあまりなることと人申しめり云々」と述べている。このほか, 兼家の若き頃の一夫人 (藤原道綱母) の作『蜻蛉日記』(954~974) には次のような庭の池水の模様が見られる。すなわち「(女絵) 見れば釣殿とおぼしきかうら (註: 高欄) に押しかかりて中島の松をまわりける女あり云々」と池水・釣殿・中嶋・松木立が庭の中にまとめて述べられている。この『蜻蛉日記』は女流日記の先駆をなすものであることはいうまでもない。彼女の主人格藤原兼家の東三條第については詩文集『本朝麗藻』(1007) の中にも次のような大江匡衡 (1012没) の詩文 (序) がある。すなわち「暮春侍。宴左丞相 (註: 道長) 東三條第。洛城有。一形勝。世謂。之東三條。本是大相国 (註: 兼家) 之甲第。傳為。左丞相之花亭。聖上不。忘。旧里。再。天臨。始廻。翠萃。一日禮。外祖於當時。今准。紫禁。二年移。朝議於此地。爰泉石増。美。庭実千品。整。伶偏於龍舟。自調。春波之妙曲。擇。黒客於鳳筆。皆望。夜月之明文。矣。盖當。曲水之翌日。翫。艷陽之風光也云々」と[なお, これと同調のものが『江吏部集』(1010) にもある]。

かくて藤原一族の栄華の生活はいわゆる皇室の内裏に対して新内裏あるいは里内裏としていっそう増幅されていくことは当然である。清少納言の名品『枕草子』(245条) にもその様子がうかがえる。このような準内裏風とは寝殿南面の池水とのかかわりが強くなっている。例えば竜頭鵜首という元来皇室専用の舟さへ浮かぶ趣好が池水の中に持ち込まれてくる。ところが, いわゆる本来の内裏にはこのような池水は見られない。時代が下っ

て順徳天皇（在位1210～1220）の『禁秘抄』によれば、例えば「御溝（ミカワミヅ）」の項に「近來東庭潺湲任レ蹙流。上古ハ或ヒハ風流サマザマ也。流非_レ一脈_一且古立石等在_レ籬砌_一也。以上当時、如_レ昔無_レ變。此外所々草樹多云々」とあり、その外前栽一松一梅一橘一櫻栢等の樹木が述べられ、当時も池水のことは見られない。

これに対して藤原一族の寝殿式南庭においてもしばしば年中行事の諸行事が行なわれ、背景には池水の景物があり、多様の催しを増幅させるに役立っている。そのことは『源氏物語』あるいは『栄華物語』等によってすでに造園史家の強調するところであるが、最も真実を語るの、その用語についても、又身近かなのは和文の「日記」類にちがいない。その母型ともいえる『紫式部日記』には道長の土御門第の様子〔寛弘5（1008）年〕*を取えて長文ながら引用すれば次の通りである。すなわち①「秋のけはひ入り立つまに土御門殿の有様いはむかたなくをかし。池のわたりの梢ども遣水のほとりの草むら、おのがじし色づきわたりつつ、おほかたの空もえんなるにもてはやされて、不断の御読経の声々あはれまさりけり。やうやう涼しき風のけはひに例の絶せぬ水のおとなひ、夜もすがら聞きまがはさる。（中略）観音院の僧正、ひんがしの対より二十人の伴僧をひきゐて御加持まゐり給ふ足音、渡殿の橋のとどろとどろと踏みならさるるさへぞ、ことごとくのけはひには似ぬ。法住寺の座主は馬場殿、浄土寺の僧都は文殿などにうちつれたる淨衣姿にて、ゆゑゆゑしき唐橋どもを渡りつつ、木の間をわけてかへり入るほども、はるかに見やらるる心地してあはれなり。人々まゐりつれば夜も明けぬ。渡殿の戸ぐちの局に見いだせば、ほのうち霧いたる朝の露もまだ落ちぬに、殿（註：道長一左大臣、正二位）ありかせ給ひて、御隨身召して（日ごろうづもれた）遣水はらはせ給ふ。橋（註：遣水の橋）の南なる女郎女のいみちうさかりなるを一枝折らせ給ひて几張の上よりさしのぞかせ給へり云々」②「五日の夜 殿（彰子）の御産養。十五日の月くもりなくおもしろきに池のみぎは近く、かがり火どもを木の下にともしつつ、屯食ども立てわたす。殿司が立ちわたれるけはひもおこたらず、書のやうなるに、ここかしこの岩がくれ木のしたに、うち群れつつをる上達部の隨身などやうの者どもさへ、おのかじし語らふめることは、かかる世の中の光のいでおはします云々」③「またの夜、月いとおもしろし。ころさへをかしきに若き人は舟にのりて遊ぶ。色々なるをりよりもおなじさまにさうぞきたる、やうだい、髪のはど、くもりなく見ゆ。（中略）大勢はし近くゐたるを左の宰相の中将殿の中将の君（註：藤原兼通、道長二男）いざなひいで給ひて、右の宰相の中将兼隆に棹ささせて舟にのせ給ふ。かたへはすべりとどまりて、さすがにうらやましくやあら

む。外見いだしつゝみたり。いと白き庭に月の光りあひたる、やうだいかたちもをかしきやうなる云々」

④「行幸ちかくなりぬとて、殿のうちをいよいよつくるひみがかせ給ふ。世におもしろき菊の根をたづねつつ掘りてまゐる。色々うつろひたる黄なるか見どころあるも、さまざまに植ゑたてたるも、朝霧の絶え間に見わたしたるはげに老もしりぞきぬべき心地する云々」

⑤「その日（行幸）、あたらしく造られたる船どもさし寄せさせ御覧ず。龍頭鰐首の生けるかたち思ひやられて、あざやかにうるはし云々」⑥「暮れゆくまに、楽どもいとおもしろし。上達部、御前にさぶらひ給ふ。万歳楽、太平楽、賀殿などいふ舞ども、長慶子（曲名）を

まかで（退出）音声にあそびて、山のさきの道を舞ふほど遠くなりゆくまに、笛の音も鼓の音も、松風も木深く吹きあはせていとおもしろし。いとよくはらはれたる遣水の心地ゆきたるけしきして池の水波たちさわぎそぞろ寒きに、うへの御相（あこめ）ただふたつ給へたり云々」⑦「十一日（註：寛弘6年9月11日）の暁、御堂（註：邸内の池の中島の供養堂）へわたらせ給ふ。御車には殿のうへ、人々は舟にのりてさし渡しけり。（中略）事はてて殿上人舟にのりて、みな槽ぎつづきて遊ぶ。御堂のひんがしのつま、北向きにおしあけたる戸のまへ、池につくりおろしたる橋の勾欄をおさへて、宮の大夫はる給へり。（中略）「舟の中にや老をばかこつらむ、といひたるを聞きつけ給へるにや、大夫、徐福文成

誕誕多し（註：徐福の蓬萊山の意）とうち誦じ給ふ声もさまざまこよなういまめかしく見ゆ云々」さらに『紫式部集』にも土御門殿（寛弘一年9月の条）に「月の隈なきに若人たち舟に乗りて遊ぶを見やる。中島の松の根にさしめぐるほど、をかしく見ゆれば「曇りなく干歳に澄める水の面に宿れる月の影ものどけし」」等々とある。

当時このような池水の庭がはたしてどの程度の貴族階級に可能であったかは詳らかにされていないが、『作庭記』のいう方一町（約4500坪）級の邸宅とは当時の三位以上の公卿を対象とした居宅の班給であり、しかもそれらの階級の人数はほぼ25名前後とされているところに従えば、それはきわめて限られた特異の状態と言わざるをえない（註：上述の最高級の土御門邸、東三條殿は何れも方二町という）。換言すれば、そのように特異のものであったが故に当時の羨望の対象となり、その後の文学や絵画の題材として世情を賑わしたものと見ざるをえないとも言える。又、反面、藤原の栄華も道長、頼通の時代を頂点として次第にその衰えを見せる。すなわち彼等に対する反感は院政（1086年以後）という特殊の政治形態を実現させるし、又現世浄土の世情から来世浄土の世情へと移り、そのことは保元・平治の乱、つづいて源平の争乱を経て一種の無常観を誘発することにもなる。その

頃を境として庭についても禅庭とか露地といった目新しい用語さえ散見するようになる。例えば詩集『本朝無題詩』(1162)、あるいは「系譜」(8)の『文鳳鈔』(1246)のようなものはその一示例といえる。これらのことを最も鮮明にしたのが鴨長明の『方丈記』(1212頃)にちがいない。すなわち、その冒頭に「玉敷の都のうちに棟を並べ薨を争える、高き賤しき、人の住いは世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば昔ありし家は稀なり。或は去年焼けて今年造れり。或は大家亡びて小家となる。(中略)火の光に映じてあまねく紅なる中に風に堪へず吹き切られる焰、飛ぶが如く1~2町を越えつつ移りゆく。(中略)或は身ひとつかりうじて逃るも資材を取り出づるに及ばず。七珍万宝さながら灰燼となりにき。そのつひえいくそばくぞ。そのたび公卿の家16焼けたり。ましてそのほか数へ知るに及ばず。すべて都のうち三分の一に及べり。人のいとなみ皆愚かなる中にさしもあやふき京中の家をつくるて宝を費し、心を悩ます事すぐれてあぢきなくぞ侍る」と。そして『方丈記』の末尾の中では「それ三界はただ心一つなり。心もし安からずば象馬・七珍もよしなく、官殿・楼閣も望みなし。今さびしきすまひ、一間の庵みづからこれを愛す。おのづから都に出でて身の乞匄(がい)となれる事を恥づといへども、帰りにここに居る時は他の俗塵に馳する事こそあはれむ。(中略)閑居の気味もまた同じ。住まずして誰かさとらん 云々」という。

このことは当時の世情が造園界について云えば正に一種の小庭思想を誘発する方向に向っているといっても過言ではない。試みに、鎌倉期から室町前期にかけて小庭に関係するいくつかの用語例を列記すれば次の通りである。

壺(『源氏物語』・『枕草子』・『色葉字類抄』・『山家集』等)、小庭・坪(『平家物語』・『古今著聞集』・『色葉字類抄』等)、坪ノ内(『平家物語』・『運歩色葉集』等)、露地(『本朝無題詩』・『文鳳鈔』・『運歩色葉集』(附)法華經譬喻品)等)

この背景には前述の『方丈記』のほか、時代は降って鎌倉幕府崩壊の末期に成立した吉田兼好の『徒然草』(1336)の中にも、これを知る示例をあげることが出来る。その第137段には「世をそむける草の庵にはしづかに水石を遊びて、これをよそに聞かと思へるはいとはかなし。しづかなる岩のはざま、無常の敵追ひきたらざらんや」とか、又第224段には「陰陽師鎌倉より上りてたづねまうでたりしが、まづさし入りて“この庭のいたづらに広きこと、あさましくあるべからぬことなり。道を知るものは植うることを勤む。細道一つ残してみな畠に作りたまへ”といさめはべりき。まことにすこしの地をもいたづらにおかんことは益なきことなり。食物、薬物などを植ふおくべし」などは正にそのよい一例といえる。

そのほか特筆すべきことは兼好と同時代に生きた禅門の高僧(例:虎関師錬その他)の間にも小庭・盆石愛好の風潮があり、それらを示す文献が残っている(例:『済北集』等)。このことは後世茶禅一味などという語句にも相通するいわゆる露地庭の普及を必然的なものにしたといえるはずである。

次に、再び庭の原初にもどって庭の実利的なものと庭の趣味的なものとの関係にささか言及して見たい。それは庭潦(ニワタヅミ)という用語である。これはかなり古くから散見できる用語であって、すなわち平安朝の『倭名類聚抄』(930)には「潦、爾八太豆美、雨水也」とあり、又『古事記(仁徳紀)』に水潦、『日本書記(皇極紀)』に潦水、『万葉集』では庭立水(1370)、庭多泉(178)などと読ませている。この中で『古事記(仁徳紀)』に非常に示唆に富んだ一節がある。すなわち「大(いた)く雨ふりき。(中略)庭中に跪(ひざま)づきし時その臣(丸邇臣)紅き紐著けし青摺の衣を服(き)たり。故水潦紅き紐にふれて青紅き色に変わりき 云々」と。これは正に庭とはすでに述べた通り建物に囲まれた平坦な土地(すなわち平庭)であり、雨水で排水ができず水浸しになったというわけである。最近、約10年ほど前に東工大教授平井聖氏はその著書『日本住宅の歴史』(昭和49, NHKブックス209)の中で寝殿造りの庭園に触れ「平安京が区画されたところ、それぞれの敷地では涌いた水が、南西すみあたりに水たまりをつくったことであろう。そこから池を堀ることを思いついたのではないだろうか 云々」と技術家らしい推測を行っている。これは寝殿の前の池水が初めは水たまりのための受け皿という実利的なもので、その後趣味的なものになったという見方である。しかし、この確証はない。前述した庭潦の用語例もそのような推測に無縁とは言い難い。今後に残された興味ある問題ということも出来る。

又、遣水という用語も本来は庭内に溜まった雨水等の排除のためのものであって、内裏における御溝(ミカハミヅ)はよくそのことを示す用語例といえる。「系譜」(8)に示した平安末の辞典『色葉字類抄』の中にも遣戸・蚊遣火などをあげ、正に遣水が排水、放水、引水等のための溝であったと解することを示している。もっとも、遣水がいつ頃から風致的趣味的なものになったかは明らかでないが、古いところで『宇津保物語』(983)の中に出てくる場合は正に趣味的であったといえる。上述の『色葉字類抄』に、ヤリミズに潺湲の字をあてているのも、それと解釈されるし、古く『倭名類聚抄』(930)の「水部・水泉類」に潺湲・泉などの字句が見られるのもそれと軌をいつにしたものといえる。「庭」という平坦な土地を示す用語例と深くかかわっているということが出来る。この遣水を上述の潺湲と対比すると、この用語は漢語としてすでに使用されていて、例えば白居易の「春

江」という詩の中にも出てくる。すなわち「砂を榮（めぐ）り、石を遡（めぐ）りて緑滌浚たり」とある。風流な遣水の先例にちがいない。この「春江」という漢詩は嵯峨天皇（在位809～823）の引用例があり、その一部誤字が小野篁（たかむら）に指適された故事で知られている（吉川幸次郎編校『中国詩人選集』13参照）。なお古く滋野貞主ら撰『経国集』（827）に嵯峨上皇の詩文（清涼殿畫壁山水歌一首）の一節「滌浚触_レ石落_二浚限_一云々」と見えるのも無縁とはいえない。

4. 「山水」についての解析

庭の趣味性が問われる前提として、それぞれの時代の有力者達がどんな型の遊楽（現代流に言えば outdoor recreation）を求めていたかが問われてよいはずである。それはわが国の史書『古事記・日本書紀』（いわゆる「記紀」）の中ではその対象は「庭」ではなくて、もっぱら域外の狩猟（すなわち、遊猟、馳猟、射猟、縦猟、葉猟等）の場であり、又郊外に盛んに作られた灌漑用溜池の利用（例：『古事記（垂仁記）』、『日本書紀（履中紀）』や郊野での郊外遊（例：『日本書紀（雄略紀）』などであった。特に顕著な示例は『日本書紀（武烈紀）』に見られる「この時に及（いた）り、池を穿（ほ）り、苑を起（つく）りて禽獸を盛（み）つ。而して田獵を好みて狗（いぬ）を走らせ馬を試（くら）ふ云々」の記事である。そのほか『同紀（顕宗紀）』の「三月上巳、幸_二後苑_一曲水宴云々」と三ヶ年間同文の庭外宴遊の記事も見られる（もっともこの記事には記述の不確実性が既に指適されている）。このように趣味的な庭が登場しないのは、その理由の一つとして当時の宮都が頻繁に移遷し、貴族官人達の居宅の安定性の乏しさがあげられる。すなわち天武・持統（673～696）と政局が安定するに従い、この居住班給の制度もハッキリとしたものとなってくる。例えば持統天皇五（691）年に「右大臣に賜ふ宅地4町、直広貳より以上2町、大参より以下1町、勤より以下無位に至るまでは其の戸口に随ふ云々」（『日本書紀』参照）との詔勅が出されている。以後、藤原宮（694）、平城宮（710）、平安宮（794）と都城が定まり、宅地班給も整ってくる。『続日本紀』天平六（734）年には「班給_二難波京宅地_一。三位以上一町以下、五位以上半町以下、六位以下四分之一町以下」とあり、以後の慣例となっている。かくして、各居宅には先づ草木が植えられ、前栽（せんざゐ）という用語も定着してゆく。かくして庭の趣味性も深まってゆくことは否めない。しかし池水の如き大がかりな造園趣好が登場するのがいつ頃なのかは既に前節でも述べた通り明らかにされてはいない。

それにはもう一つの理由をあげる必要がある。すなわち、風景（山水）←苑（園）対庭→小庭（坪・坪ノ内・

露地）といった造園形式の体系の中で十分確認しておくことが必要である。換言すれば古い時代からよく文献に散見される「しま（志満・山斎・嶋）」によって代表される造園用語について、これをもう少し究明すると、嶋・山斎（志満）・山莊（墅）・別業・離宮（行宮）などの一連の用語が浮んでくる。例えば『日本書紀』（雄略紀2年）に「冬十月御馬瀬に幸す。真人に命じて縦に獵す。獵する毎に大きに獲。鳥獸尽きむとす。遂に庭（めぐ）りて林泉（しま）に憩ふ云々」とある。明らかにこの林泉とは天皇の仮（行）宮か離宮の苑地であることが前後の語句から判断される。又同じ『日本書紀』（用明天皇1～2年）に炊屋姫皇后（註：敏達皇后）之別業、物部守屋大連之別業の注記も見える。これらは、すでに離宮とか別荘のあったことが判断される。下って、『万葉集』にも山斎の用語が数ヶ所散見される。志満又は之満と読ませている。すなわち「妹として二人作りし吾が山斎は木高く繁くなりけるかも（452）、君が行けなくなりぬ奈良路なる山斎（志満）の木立も神さびにけり（867）、春さらばををりをりををり鶯の鳴くわが山斎嶋ぞ止まず通はせ（1012）、鶯鶯（乎之）の住む君がこの山斎（之麻）今日見ればあしびの花も咲きにけるかも（4511）」などがその数例である。

このように高級官人達は私第（庭）のほかに山莊があり、十分に山水風景を借景として楽しんでいたこともうかがえる。このことは平安期は勿論、鎌倉・室町に至るまで絶えることはない。洛西天竜寺も原初は亀山院の離宮であり、又鹿苑寺（金閣）庭園もその前身は藤原公経（1244没）が創建した西園寺北山第であったという。このほか歌聖藤原定家（正二位権中納言、1241没）のような人も、京中の邸宅（一条京・第）のほかに百人一首を選出した小倉山莊をもっている。また『作庭記』の著者によく擬定される橘俊綱（正四位修理大夫1094没）も立派な山莊（「臥見亭」）をもっていたことがよく知られている。このように高級官僚はいずれの時代を問わず、なんらかの形で郊外に山莊を持っていたのである。

これらのことは寝殿造り庭園（これを様式上縮景式と呼んでもよい）とは異質な（これを借景式と呼んでもよい）ものがわが国の造園様式の中に大きく介在していることを無視するわけにはいかない。この後者こそが本来の山水であり、その通称は時に自然風景を主体とし、時に人工風景を優先して、山水という造園用語が登場する。ちなみに、前述した山斎（しま）の用語はその作者に在原業平が擬せられたりもする『伊勢物語』に次のような一節があってその後ほとんど見られない。すなわち「（前略）その山科の宮に滝おとし、水走らせなどしておもしろく造られたるにまうで給う。（中略）紀の国の千里の浜にありけるとおもしろき石、島（しま）このみ給ふ君にたてまつらむ云々」とあり、嶋大臣蘇我馬子

の邸宅も亦山荘と見るべきで、その山荘は天武天皇の草壁皇子の離宮となり、『万葉集』（170～193）に島の宮として「島の宮勾の池の放ち鳥人目に恋ひて池に潜（かづ）かず」を始め23首が集められていることとも無縁ではないはずである。

本来、山水という用語は古くからすでにわが国の漢詩文集：『懷風藻』（751）、『文華秀麗集』（818）、『本朝麗藻』（1007）を始め『和漢朗詠集』（1013～18）、『本朝文粹』（1044～58）などにもしばしば散見されることは周知の通りであるが、なぜか古い時代の和歌集にはほとんど見られない。山川（河）を別とすればサンスキ・せんずみなどの語音是和歌の中ではナジめないひびぎを持っていたのかも知れない。ところが真の自然を愛しつづけた自然歌人西行法師の歌集『山家集』（1190）にはこの山水を詠み込んだ歌が数首見られる。当時の歌論の一つ『御鳥羽院御口伝』（1239）には西行こそ生得の歌人として讃えている。この生得という用語は『作庭記』の冒頭にも「生得の山水」としてよく知られている。また道元禅師の『正法眼蔵随聞記』（1238）にもあり、又、その山水観は同じ道元の『正法眼蔵』第一巻「弁道話」（1231）や第十四巻「山水径」（1240）の中でも言及され、いわゆる山川草木悉皆成仏といった禅理に観念的につなげられている。この生得（生まれつき）の用語は、『平治物語』（1220）の中にも、又、長明作といわれる説話集『発心集』（1216）の中にも見られる。そして同じ鴨長明の歌論『無名抄』（1211）には次のような注目すべき山水論がある。すなわち「たとへば山水を作るに松を植ふべき所には岩を立て池を掘り水をまかすべき地には山を築き眺望をなすがごとく、其の所の名によりて歌の姿をば飾るべし。是等いみじき口伝なり云々」と。すなわち山水を造園する場合と比較して各地の名所を歌枕として歌の姿に随ってよむ場合と自からかけ合っているもので、このことと違（たが）っては、いみじき風情もあるようで実は破れて聞こえるというのである。この長明の場合、明らかに山水と造園とが一体的なものとして観念されていることがわかる。それから約130年ほど時代が下って、鎌倉末期の禅僧夢想国師の『夢中問答（万事放下）』（1344開板）の中にも「古より今に至るまで山水とて山をつき石を立て樹を植え水を流して嗜愛する人多し。その風情は同じと言へども其の意趣は各々ことなる。（中略）然らば即ち山水をこのむは定めて悪事ともいふべからず、定めて善事とも申しがたし。山水には得失なし、得失は人の心にあり云々」と述べ、国師もまた山水と造園との一体性を説いている。

このように山水と造園との密接不可分の関係が高まっていくに従って、造園用語の上にも假山とか枯山水とかいった新語が意識されてゆく。例えば『撮撰集』（1454）という古辞書には「假山即山水也」とあり、『尺素往来』

（1481頃）には「假山水者、云々」とか「枯山水（フルセンスイ）」とかとあり、又『庭訓往来註』（同時代）にも「枯泉水（カラセンスイ）」などと書かれている。假山・枯山水の用語も亦その時代の新しい傾向を示しているものといわざるをえない。最後に、山水の用語と関連して、次の二つの問題を加えておきたいのである。その一つは「せんずみ」という呼び方である。最も著名な一つは『源氏物語』（1008）の「せんずみ」であり、他の一つは『平家物語』（1242）の「せんずみ」である。ところが前者の「せんずみ」は正しく自然の山水風景型であって、「絵合」・「若葉上」の各巻に出てくる山水は屏風絵閑聊のものであり、「明石の巻」にあり、山水は「後の世の事を思ひすましつべき山水のつらにいかめしき堂を建てて三昧を行ひ云々」とあるのも自然の景の中の一節にちがいないのである。これに対して後者は次のように造園型の「せんずみ」といえるのである。すなわち巻6（洲股合戦）には「かの御所（註：法住寺殿）は去んぬる応保元（1161）年4月15日造り出されて、山水木立に至るまで思召す盡なり、云々」とあり、また有名な（灌頂の巻）の中には「西の山の麓に一字の御堂あり。すなわち寂光院これなり。旧う造りなせる山水木立由ある様の所なり、云々」とある。いずれも造園的であることは間違いない。その上、『平家物語』は『源氏物語』と違って、異本、流布本、平曲本などが多く知られ、この「せんずみ」にしても、山水、前水、泉水などの漢字を当て諸本によってマチマチであることが指摘されている（例へば小学館本、日本古典文学全集『平家物語』参照）。下って室町期に出刊された『節用集』（文明本）では「泉水、サンスイ、或作「前水」、庭也」と定義され、これらの紛らわしい造園用語はすべて「庭」という狭い枠の中に集約され造園界も小庭化が目立ってくる。それ以後造園すなわち山水の関係は姿を消してゆくことになる。それが復活するのは恐らく元禄期（例えば芭蕉の草庵別墅の自然趣味などの復活）以後と見るべきであろう。

次にもう一つの問題点は白楽天の影響いかんということであって、彼の『白氏文集』（長慶集も含めて）がわが国の文学界一従って思想界に及ぼした影響は無視出来ないはずである。就中、彼の「草堂記」（817）は「池上篇并序」とともにわが国造園史の上でもしばしば論及されている。特に「草堂記」の中の「拳石を聚めて山と為し、斗水を環らして池と為し、其の山水を喜ぶ。病癖此の如し云々」の一節は白居易の山水的造園をよく物語っている。前述した『夢中問答』の中でも国師は白楽天に触れ「白楽天小池をほりて其の辺りに竹をうゑて愛せられき。其の語に曰はく、竹は是れ心虚しければ我が友とす。水は能く性浄れば吾が師とすと云ふ」と言及している。1200年代藤原定家と同時代の風流人内大臣源通親

(1202没)は「擬香山模草堂記」を書いている。通親とは道元禪師の父親であり、彼もまた晩年鳥羽の久我に山荘をもっている。これが「模草堂」である。この香山が白楽天の別称香山居士であることは勿論である。因に平安の盛期に活躍した中書王(具平親王1009没)は『本朝麗藻』(1007)の中で「古今詞客得_レ名多。白氏拔群足。我朝詞人才子以_二白氏文集_一為_二視摹_一。故承和(834~848)以来、言_レ詩者皆不_レ失_二(白氏)体裁_一矣云々」とのべている。

正に、わが国の造園史の上に占める白楽天も単に慶滋保胤の『池亭記』(982)との関係にとどまらずもっと長い歴史の上で造園様式を研究すべき多くのものを物語っているのではないかと考えられるのである。

(追記)

表題の英訳を Court and Landscape としたのに対し、前報の題目「苑と園」 Landscape & Garden を改

めて“Park & Garden”と呼び換えたい。本来 Park とは狩猟地の意であって Garden の人工型に対して自然型のことを意味する造園手法上の用語であり、しかも、イギリスのこれまでの都市計画法上における解義に従えば、Park は Public P. と Private P. を含み、我国で今日まで一般に通用してきたいわゆる単なる公園(パーク)のように必ずしも限定されたものではない。さらに Park には Landscape と異り、一定の領域を持っている点で「苑」の概念に該当するとみただけである。ただ従来わが国で一般化してきた公園の概念に混乱をきたす点に問題もあるが、今回「山水」(Landscape)の用語を取り扱うことになったために、改めて明らかにせざるをえなくなった次第である。このような用語例は例えば独乙語の Wald と Forst の間にも言えるものであり、本研究とも無縁ではない。

(1982, 8. 25 受付, 1983, 1. 22 受理)

Summary : The terms such as “Niwa (Court)” and “Sansui (Landscape)” have historical backgrounds. We have to take notice historical terms of Landscape Architecture. These words often contains the qualitative meaning refering technique of Landscape Architecture. The purpose of this study is to make out “collection of archaic terms of Landscape Architecture” in order to contribute to clarify the history of these terms. Until now genealogy from no. 1 to no. 8 is shown. [See “En” and “Sono” (Park and Garden), Journal of the Japanese Institute of Landscape Architects Vol. 45 No. 2]